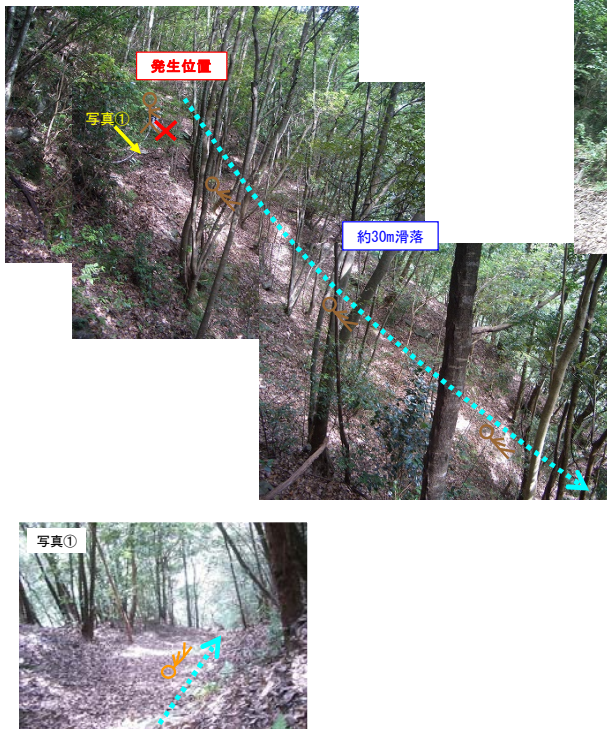


事故種類	労働災害	発生日時	平成22年8月19日 11時30分		
事故区分	労働災害	年齢性別	42歳 男性	職種	設計担当者
被災程度(全治)	高エネルギー外傷(全治2週間の見込み)				
事故概要	ダム調査用の横坑の立入防止施設を設計するための現地調査において、斜面を等高線沿いに移動中、調査員3名のうち最後尾を歩いていた調査員1名が足を滑らして30m滑落し、高エネルギー外傷を被った。				
事故原因等	急峻な場所の調査に必ずしも適した靴ではなかったこと、歩行中の足元への注意が不十分であったことなどである。				
改善策等	・山地の調査においては登山靴を適用するなど、現地状況に適した靴を着用すること。 ・必要に応じてロープ等を準備し、安全確保に努めること。 ・調査開始前のKY活動時において、相互に服装をチェックし、必要に応じて是正すること。 ・当日の現地状況を確認し、調査中止を含めた検討を行うとともに、通路部足場の安全確認を行いながら移動すること。 ・移動及び作業中においては、お互いに安全確認・指示を行い、情報共有を図ること。				
類似工事(他工事)へ活用できる対策等	・山地の調査においては登山靴を適用するなど、現地状況に適した対策の実施。 ・必要に応じてロープ等を準備し、安全確保に努める。				

事故状況図

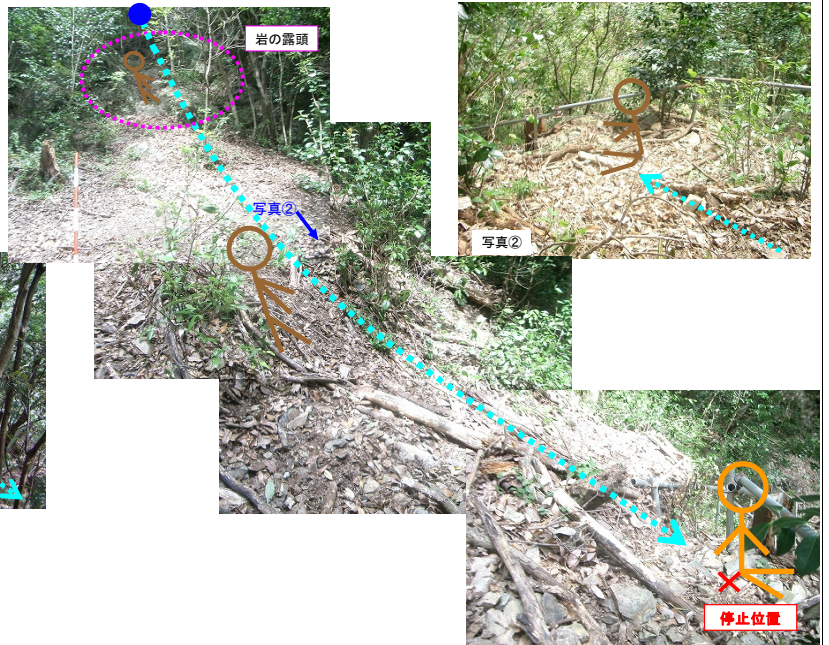
◆滑落発生位置の状況

滑落発生位置は急斜面であり、落ち葉の堆積により滑りやすい状況。



◆滑落停止位置の状況

発案停止位置においても急勾配。発生位置から停止位置の途中には岩の露頭が有り。



改善策



- ・山地の調査においては登山靴を適用するなど、現地状況に適した靴を着用すること。
- ・調査開始前のKY活動時において、相互に服装をチェックし、必要に応じて是正すること。



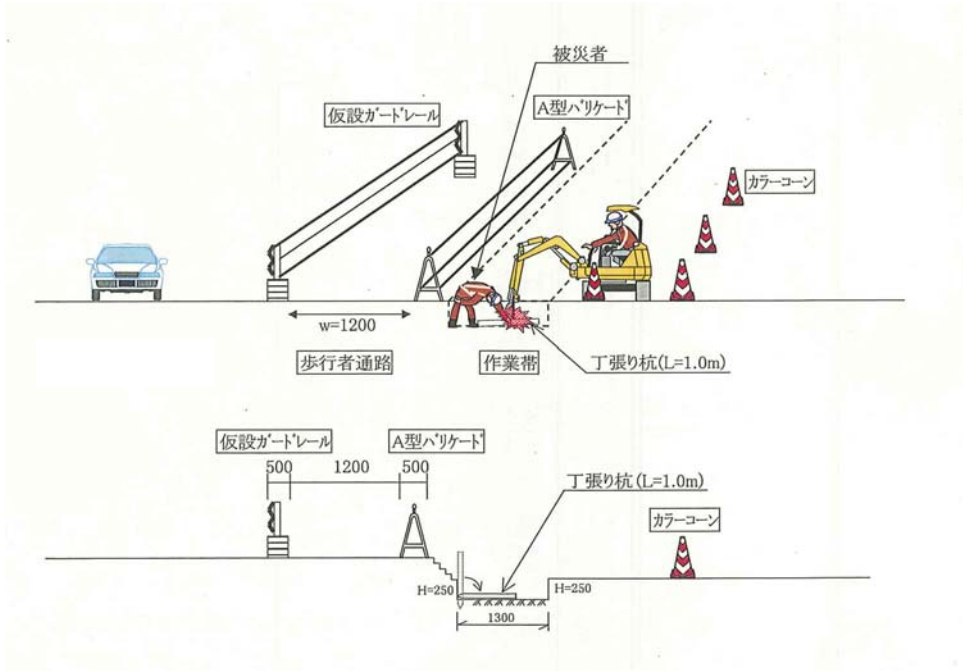
- ・必要に応じてロープ等を準備し、安全確保に努めること。

事故種類	労働災害	発生日時	平成22年8月21日 15時40分		
事故区分	労働災害	年齢性別	70才男性	職種	船員
被災程度	右下肢切断				
事故概要	鋼矢板を海上より施工するため、船上にて鋼矢板とウォータージェットの配管溶接作業を行っていた際に、時間が空いたため、溶接作業に従事していない作業員で傷んでいた左舷の係留ロープの交換作業に着手した。 左舷前側のウィンチドラムから係留ロープの巻きしろを10m程度残したところまで作業船により引き出し、残りのロープを人力によりウィンチドラムから引き出した後、係留ロープとウィンチドラムを固定していた補助ロープを取り外した。 その後、作業船で係留ロープの引き出し(抜き取り)作業を行っていた際に、起重機船上にあった係留ロープに足をとられ、そのまま船首ローラに引き込まれ、右足を被災した。				
15 事故原因等	係留ロープの交換については、当日の予定作業ではなかったが、下請のメンバーで何度も経験のある作業であったので、作業手順書の作成、作業手順の作業員への周知及びKY活動を実施していなかった。また、係留ロープの交換を備品等の交換と同様に考え、元請に報告しないまま作業を開始した。 係留ロープの交換の際には、被災者が危険箇所には立ち入りを禁止する柵、バリケード等を設置するとともに、注意標識を掲示する。				
改善策等	●作業手順書を作成し、作業員全員に周知するとともに、KY活動を実施する。 →合図者は、作業員の危険箇所からの待避状況の確認等、周囲の安全確認を実施したうえで、警笛、拡声器もしくは無線機等を用い、作業員一人一人が確認できる方法で合図を出す。 →ロープ、ワイヤーの取付時及び交換時には、合図者とは別に安全確認者(見張り員)を選任する。 ●アンカーワイヤー、操作ワイヤー、係留ロープの内角には立ち入りを禁止する柵、バリケード等を設置するとともに、注意標識を掲示する。 ●予定以外の作業または作業内容が変更となる場合は、下請は作業を中断し、元請に報告し指示を仰ぐ。				
類似工事(他工事)へ活用できる対策等	同上「改善策等」による。				

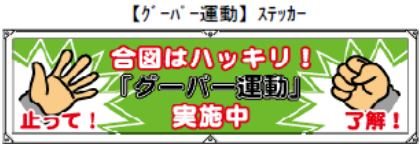


事故種類	労働災害	発生日時	平成22年8月26日 13時50分		
事故区分	労働災害	年齢性別	60歳 男性	職種	普通作業員
被災程度(全治)	左中手骨開放骨折(全治4週間)				
事故概要	管渠型側溝の掘削床付をバックホウ(0.15m3級)にて行っていたところ、設置していた丁張杭が倒れたため、旋回半径外にいた作業員(被災者)が作業の邪魔になると思い、バックホウのオペレータに合図をして、旋回半径内に立ち入り、倒れた丁張杭を撤去しようと左手を伸ばした。 バックホウのオペレータは合図に気づかず作業を続けたため、バックホウのバケットが被災者の左手と接触し被災した。				
16 事故原因等	・合図者がバックホウの停止を合図したが、停止を確認する前に合図者自身が作業範囲に立ち入った。 ・バックホウのオペレーターが合図者の合図に気づかなかったこと、作業範囲内に立ち入った際に直ちに停止しなかった。				
改善策等	・合図者とオペレーターが互いに合図を送りあう「グーパー運動」で統一する。 ・作業範囲内進入防止のため、カラーコーンに加えバーを設置する。 ・バックホウのアームに「周囲確認ヨシ!」のステッカーを貼り、意識を高める。 ・KY活動は、当日の作業箇所を実施する。				
類似工事(他工事)へ活用できる対策等	・重機の作業範囲内に立入る際の合図と確認の徹底。				

事故状況図

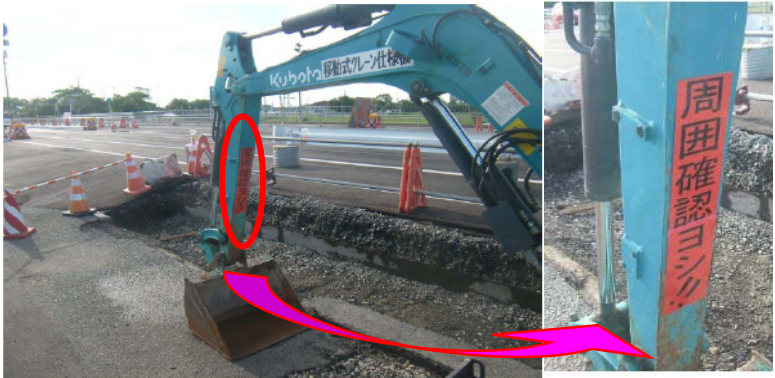


改善策



バックホウアームに「周囲確認よし!」のステッカーを貼り安全意識を高める。

貼付け状況



事故種類	一般事故	発生日時	平成22年8月27日 9時00分		
事故区分	公衆災害	年齢性別	—	職種	—
被災程度(全治)	ガス管(φ150)の破損(家屋への影響は無し)				
事故概要	道路横断方向の既設ヒューム管(90° 巻)の撤去作業において、地下埋設が歩道部にあると占有企業者と確認し、歩道部を人力、車道部をバックホウ(0.25m ³)にて撤去作業を行ったところ、車道部の作業中にガス管(φ150、ポリエチレン管)がヒューム管の根巻きコンクリートの中に一緒に巻かれていたため、ガス管が根巻きコンクリートと一緒に持ち上がり、ガス管が破損した。				
17 事故原因等	①適切な試掘計画が策定されていなかった。 ②「掘削影響範囲内は必ず試掘を行う」ことが、実行されていなかった。 ③占有企業者との現地立会いにおいて「歩道部に地下埋設物がある」と言われたため、車道部には無いと言う思い込みがあった。				
改善策等	①「地下埋設物件の事故防止に関する特記仕様書」に従い、地下埋設物件が掘削影響範囲内にある場合は、必ず試掘を行う。 ②埋設位置が不確定なものを立会いのみで判断しない。				
類似工事(他工事)へ活用できる対策等	・「地下埋設物の事故防止に関する特記仕様書」に記載されている切断防止対策の徹底。 ・地下埋設物件に50cm程度に近接した位置からは、必ず人力による掘削施工で慎重に行い、地下埋設物件の損傷防止に努める。				

